

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：32677

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：25770117

研究課題名（和文）1850年～1920年のアメリカ小説における「アメリカンガール」像の研究

研究課題名（英文）A Study of the representation of the American Girl in American literature from 1850 to 1920

研究代表者

新井 景子 (Arai, Keiko)

武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：20557194

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来アメリカ文学における女性像の研究においてほとんど注目されてこなかった“girl”（少女、結婚前の若い女性）像の特殊性に焦点を当て、1850年～1920年のアメリカ文学における少女・女性像を考察した。本研究は報告者の「アメリカンガール」像に関する継続的研究をさらに発展させたものであり、特にこれまであまり研究されてこなかった、19世紀半ばのヴィクトリア朝から世紀転換期に至る過程の“girl”像の変化を中心に考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

“girl”というカテゴリーを軸に、世紀転換期前後のアメリカ文学における少女・女性表象を広く考察する本研究は、アメリカ文学における女性表象研究の発展に寄与し得る、意義のあるものと考えられる。さらに本研究では、小説における「アメリカンガール」表象を当時の文化状況全体の中で捉えていくことに加え、「アメリカ」という国家の問題と女性の社会進出という問題を交差させて論じることを目指しており、その研究結果は、文学研究のみならず、社会・文化研究としてのアメリカ研究の発展にも大いに寄与し得る。

研究成果の概要（英文）：This study examined the representation of “girl,” whose peculiarity has not been paid enough attention to in the study of gender in American literature. Focusing on the image of American girls in American literature from 1850 to 1920, this study investigated how the image of “girl” changed from the mid-19th century Victorian period to the turn of the century, which has not been studied much.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 女性像

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 文学における女性表象の研究は国内外において非常に重要な分野であり、これまでフェミニズムの視点やクイア理論の視点など様々な観点から研究されてきた。これらの女性像研究に新たな視点をもたらす切り口として、報告者は、アメリカ小説における“girl”像に焦点を当てて研究を続けてきた。平成 19 年～21 年度にかけて、報告者は世紀転換期のアメリカに流布した「アメリカンガール」と呼ばれる女性像に注目し、当時の雑誌やイラストなども参照しながら、Henry James、Edith Wharton、Willa Cather の主要小説に描かれるアメリカンガール像を考察し、その成果は平成 22 年に米国メリーランド大学大学院に提出した博士論文“American Girls: Nation and Gender in James, Wharton, Cather”にまとめた。さらに、平成 22～24 年度は、日本学術振興会若手研究(B)の支援を受け、「19 世紀後半から 20 世紀初期のアメリカ文学における『アメリカンガール』像の変容」(課題番号: 22720114)のテーマで研究を続けた。

(2) (1)で述べた研究により、報告者は 19 世紀後半から 20 世紀初期のアメリカ小説におけるアメリカンガール像研究の基礎を固めることができた。その中で特に、19 世紀半ばのヴィクトリア朝期から世紀転換期に至る過程は、社会が急激に変化すると共に女性運動がさかになる時期でもあり、“girl”像がとりわけ複雑な位置にあることが明らかになった。19 世紀後半の“girl”像の変化に関しては、Jane H. Hunter の *How Young Ladies Became Girls*(2002) が主要文献として挙げられるが、本書は主に日記などの資料を中心にした文化研究であり、小説に関する研究はまだ十分ではない。よって本研究では、(1)で述べた報告者の研究をさらに発展させる形で、特にこれまであまり研究されてこなかった、19 世紀半ばのヴィクトリア朝期から世紀転換期に至る過程の“girl”像の変化を丹念にたどりたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) Nathaniel Hawthorne と当時の女性作家や女権運動の関係

Hawthorne の作品のうち、本研究以前に報告者の研究で取り上げてこなかった小説(*The Scarlet Letter*、*The Blithedale Romance*)および短編を考察し、Hawthorne の「アメリカンガール」像についてまとめる。特に、Hawthorne が批判の対象とした女性家庭小説作家や、Hawthorne と親交を深めた女性運動家 Margaret Fuller と Hawthorne の関係などを検討することで、Hawthorne の「アメリカンガール」像と女性運動との関係についても検討する。

(2) 1865-1910 年代の小説に描かれる「アメリカンガール」像

南北戦争後から世紀転換期にかけて出版された小説で描かれた「アメリカンガール」像を広く考察する。特に、アメリカのヨーロッパの対比が描かれているなど「国際的状况」を扱った小説、若い女性同士の強い友情(シスターフッド)を描いた小説を取り上げる。

(3) Henry James の「アメリカンガール」像の文学的位置づけ

本研究以前の報告者の研究と(2)で得られた結果から、国際的状况を多く描いた Henry James のアメリカンガール像を当時の文学的状况の中に位置づける。また、(1)の結果を踏まえ、女性像や女権運動の描き方に関する Hawthorne と James の影響関係についても考察する。

(4) 1850 年～1920 年のアメリカ文学において「アメリカンガール」像の変遷

最終的に、(1)～(3)の結果と本研究以前の報告者の「アメリカンガール」像研究を合わせ、1850 年～1920 年のアメリカ文学において「アメリカンガール」像がいかなる変遷を辿ったかを明らかにするとともに、女性像研究の中で“girl”がいかに位置づけられるかを分析・考察する。

3. 研究の方法

(1) 1850 年から 1920 年のアメリカ文学において「アメリカンガール」の問題に関わっている小説を細かく分析・考察する。

(2) (1)を進める上で、同時代の雑誌などの記事や挿絵などにみられるアメリカンガール表象とも比較する。

(3) 文学作品関連の資料や雑誌資料などを考察するために、資料収集・調査を行う。

4. 研究成果

本研究の主な成果として以下のものがある。

(1) Nathaniel Hawthorne のアメリカンガール像について、主要な小説を分析した。Hawthorne の小説ではしばしば「美しいが危険な女性であるダーク・レディ」と、「清純で保守的なモデルを示すフェア・レディ」という 2 つの女性のタイプが登場するが、報告者は後者のフェア・レディが専らアメリカの「ガール」として描かれ、作品中でガールからウーマンへと成長を遂げる様

子が描かれることに注目して Hawthorne の主要小説の考察を行った。これまでの研究では、2つの女性のタイプが Hawthorne の女性観をめぐる葛藤を表しながらも、最終的にフェア・レディが保守的な家庭像を示すことで、Hawthorne の保守的なジェンダー観が示されるという見方が示されてきた。それに対して、報告者は、フェア・レディがどこまで家父長制のモデルに従順な女性像なのかを問い直すことで、Hawthorne のジェンダー観、さらに国家観を再考した。特に報告者は Hawthorne のフェア・レディに共通する「母親との強いつながり」に注目した。母親とのつながりは家庭や愛情といった要素に結びついている点で保守的なイメージを強化するものと言える一方、小説の結末では「母の娘」として登場するフェア・レディが新しい、女性主導の家庭を導いている点を論証した。そこから、Hawthorne のフェア・レディ像（アメリカンガール像）には彼の穏やかなフェミニズムが反映され、それが彼の描くアメリカ民主主義の姿につながっているという結論を導き出した。この研究に関する口頭発表として以下のものがある。

（口頭発表・国際学会）“I am mother’s child”: Nation and Gender in *The Scarlet Letter*”
The Scarlet Letter において「ガール」として登場するパールに注目し、母と子の関係というテーマから Hawthorne の女性観あるいはフェミニズムに対する態度を考察した上で、パールがこの作品のフェア・レディと位置付けることができるのではないかと結論づけた（論文としてまとめ、現在投稿中である）。

（懇話発表）『母の娘』の系譜—Nathaniel Hawthorne の『フェア・レディ』再考
本発表では、Hawthorne のフェア・レディに共通する要素（特に母との結びつき）について概観した上で、特に *The Marble Faun* のヒルダに焦点を当てて論じた。ヒルダは従来「家庭の天使」として保守的な女性像を示す人物ととらえられてきたが、本発表ではヒルダを「ヨーロッパを旅するアメリカンガール」として読み直し、ヒルダのヨーロッパとの出会いおよび女性としての成長を検討することで、いかにヒルダが保守的な女性像を強化すると同時に揺るがしているかを考察した。

（招待講演）「ナサニエル・ホーソーンのアメリカンガール像」
これまでの報告者の研究を踏まえ、Hawthorne の主要小説におけるアメリカンガール像とそこに描かれる Hawthorne の国家観・女性観に関する研究成果を発表した。

(2)本研究以前からの報告者の研究を発展させる形で、Edith Wharton のアメリカンガール像について研究を行った。Wharton の女性像については、主にフェミニズムの観点から「男性への批判」を読み取る研究が多いが、報告者は作品に描かれるアメリカンガールとシスターフッドとの関係に焦点を当てることで、ジェンダーの問題をより複雑なものとして捉え、Wharton のフェミニズムのあり方を問い直した。また、Wharton が描いた「タイプ」としてのアメリカンガール像が映画のアダプテーションの中でどのように描かれているかについても考察した。これらの研究に関する成果として以下のものがある。

（論文）“To be herself, or a Gerty Farish”: The Powerful Presence of the Sisterhood Union in *The House of Mirth*”
Wharton が育ったオールドニューヨークを舞台にした *The House of Mirth* を取り上げ、典型的なアメリカンガールとして描かれるリリーを再考した。リリーの結婚をめぐる、物語の表面に現れる対立は、新しく上流階級に台頭する成金のユダヤ人ローズデイルと、リリーと心を通わせつつも経済的理由から結婚できないセルデンという二人の男性の対立であり、この作品は「リリーがどの男性と結婚するかあるいはしないか」という問題を中心に読まれてきた。このように従来の研究はリリーのヘテロセクシュアルな関係を前提としてきたのに対し、本研究は作品に現れるもう一人の「ガール」像であるゲーティという人物に着目し、ゲーティと主人公リリーとの関係を考察することで、作品におけるジェンダーの問題がより複雑になっていることを指摘した。ゲーティは、「新しい女性」として社会活動に取り組む人物であり、彼女との交流を通してリリーがシスターフッドの中で生きる（言い換えれば Boston marriage と呼ばれる女性同士の生活を選ぶ）という選択肢が物語の中に埋め込まれている点を論証した。

（共著）『アメリカ文学と映画』
Wharton の小説 *The Age of Innocence* のアダプテーションであるマーティン・スコセッシ監督の『エイジ・オブ・イノセンス』を取り上げ、考察した。本映画は小説に忠実なアダプテーションとして高い評価を受けているが、本研究では原作と異なる部分（視点人物ニューランドの描かれ方に加え、特にアメリカンガールであるメイと、ダーク・レディとして小説で描かれるエレンの描かれ方）に注目し、スコセッシによる2人の女性人物の外見の変更や、カメラワークの工夫を通して、人物像がどのように改変されているかを分析した。結論として、アダプテーションでは、原作にみられるアイロニーや歴史性、あるいは社会批判的側面が弱められ、より普遍的な悲恋物語として、人物の感情を描写することに重点が置かれている点を導き出した。

(3) Willa Cather の *My Ántonia* を取り上げ、これまで注目されることの少なかった登場人物リ

ーナに焦点を当てて、当時流布したアメリカンガール像と照らし合わせながらリーナ像を分析した。本研究では小説が執筆された当時の雑誌に掲載されたアメリカンガールのイラストを参照し、リーナが1910年代に雑誌などで多く描かれたモダンなアメリカンガール像をある程度反映しつつも、特にセクシュアリティの点でより革新的な「新しい女性」像を示している点を論証した。家庭を築くヒロイン・アントニアと対照的に、リーナは独身を貫いて自分の店を営むセルフメイドウーマンであり、そのような点でリーナはアメリカンガールのタイプを崩し、語り手ジムの物語を揺るがず役割を果たす。さらに報告者は、南部出身であるジムの男性性が不安定なものとして描かれている点およびリーナが作品内で南部の理想の女性像サザンベルと重ねられている点に着目し、南部出身である Cather が世紀転換期のネイションビルディングにおけるアメリカンガールの役割（「白い」アメリカを示す）と南部の伝統におけるサザンベルの役割（「白い」南部を示す）の間に共通点を見出した上で、リーナの過剰なフェミニニティを通してその両方のイメージを転覆させていると考察した。さらに本作品の中で1910年代ニューヨークで活動する政治的なフェミニストとして描かれるバーデン夫人（ジムの妻）とリーナを比較し、政治性を伴わないニュー・ウーマンとして描かれるリーナがいかに Cather の「新しい女性」像を反映しているかを検討した。研究の成果は、共著 *Something Complete and Great: The Centennial Study of My Ántonia* として出版された。

(4) 本研究以前からの報告者の研究を発展させる形で、Henry James の作品がいかに大衆的な「アメリカンガール」のイメージに関わっているかについて考察した。James は「アメリカンガール」のイメージの生みの親とも呼ばれるが、本研究では特に James の中期・後期の作品を取り上げ、執筆当時の雑誌などに描かれたアメリカンガール像のイメージや、女権運動や物質主義といった世紀転換期の社会状況を参照しながら、James のアメリカンガール像を再考した。また、従来「アメリカンガール」として考察されてこなかった女性人物を「アメリカンガール」として捉え直し、そこに描かれる James の国家観、女性観を考察した。これらの分析を通して、アメリカ民主主義を体現する James のアメリカンガール像が、大衆文化で流布した「アメリカンガール」のタイプの影響を受けながら変化していく様子を明らかにした。この研究に関わる成果として以下のものがある。

（論文）“‘Vagueness of boundary’: Democracy and American girlhood in *The Bostonians*” James が長いヨーロッパ滞在からアメリカに一時帰国した後執筆された *The Bostonians* を取り上げ、ボストンで盛り上がりを見せていた女権運動への James の反応および大衆的なアメリカンガールのイメージへの反応を考察した。本作品はアメリカンガールであるヴェリーナをめぐるバジル（男性）とオリーフ（女性）の対立を中心にして読まれてきたが、本論文では、オリーフを「アメリカンガール」と捉え直すことで、本小説を二人のアメリカンガールの物語として再考した。女権運動の申し子として登場するヴェリーナが最終的に保守的な女性像を悲観的に提示することになるのに対し、オリーフは、様々な境界を乗り越える「新しい女性」として成長するアメリカンガールとして捉えられる。これらの点を明らかにしながら、本作品では、民主主義の問題がジェンダーのみならず階級や大衆文化に密接に関連したものとして提示されている様子を分析し、アメリカの民主主義に対する James のアンビヴァレントな態度を考察した。

（論文）“Nation-Building and the American Girl: The Turn-of-the-Century Popular Culture and Henry James” James の最後の小説である *The Golden Bowl* を取り上げ、世紀転換期に雑誌に掲載された「アメリカンガール」のイラストとそれに関連したネイションビルディングの動きを参照しつつ、作品に描かれるアメリカンガール像を考察した。本小説のヒロイン、マギーは先行研究においてもアメリカンガールとして取り上げられてきたが、本論文では世紀転換期のネイションビルディングの動きとアメリカンガールのイメージとの関係をマギー像に読み込み、新たな視点を提供した。さらに本論文では、従来の研究において専ら「ヨーロッパ的な女性」として捉えられてきたシャーロットを「アメリカンガール」として読み直し、世紀転換期の大衆文化において流布したアメリカンガールの特徴がシャーロット像に見いだせることを指摘した。本論文は現在投稿中である。

以上のように、1850年から1920年のアメリカ小説におけるアメリカンガール像について発展的な研究を行い、国内外においてその成果を発表することができた。本研究の特色は、アメリカ小説における女性像研究の流れの中で特に“girl”像の特殊性に着目した点である。「子供」とも「大人の女性」とも異なる“girl”像を不安定なカテゴリーととらえ、それが国家やジェンダーをめぐる様々な境界をいかに揺るがしているかを探る視点は、これまで発表した論文や講演においても評価を受けてきている。さらに、雑誌のイラストと小説内の人物描写の比較、あるいは小説の挿絵の考察を通して、作品と雑誌文化との影響関係を論じる本研究は、小説における女性像研究という枠にとどまらず、同時代の大衆文化に対する作家たちの反応を探るという観点から、作家研究にも大きく寄与するものであると考えられる。そこで今後も、今回の研究を深める形で、20世紀前半の作品を中心にアメリカンガール研究を進めると共に、これまで得られた成果を元に、

書籍としてまとめるべく、準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Keiko Arai	4. 巻 第49巻第2号
2. 論文標題 “ ‘ To be herself, or a Gerty Farish ’ : The Powerful Presence of the Sisterhood Union in The House of Mirth ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『武蔵大学人文学会雑誌』	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Keiko Arai	4. 巻 第52巻3・4号
2. 論文標題 “ ‘Vagueness of boundary’ : Democracy and American girlhood in The Bostonians ”	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『武蔵大学人文学会雑誌』	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Keiko Arai
2. 発表標題 “ ‘ I am mother ’ s child ’ : Nation and Gender in The Scarlet Letter ”
3. 学会等名 The 21st Summer Meeting of the National Hawthorne Society（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 新井景子
2. 発表標題 「 『母の娘』 の系譜 Nathaniel Hawthorneの 『フェア・レディ』 再考 」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第55回全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 新井景子
2. 発表標題 「ナサニエル・ホーソーンのアメリカンガール像」
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Holly Blackford (Ed.), Janis P. Stout, Caterina Bernardini, Diane Pranatt, Melissa J. Homestead, Sarah L. Young, Martin Woodside, Thomas Fahy, Monroe Street, Fangyuan Xi, Jim Cody, Keiko Arai, Dana Woodcock, Zachary Tavlin	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Fairleigh Dickinson UP	5. 総ページ数 312
3. 書名 Something Complete and Great: The Centennial Study of My Antonia	

1. 著者名 杉野健太郎、諏訪部浩一、山口和彦、大地真介、川本徹、藤吉清次郎、貞廣真紀、辻和彦、堤千佳子、新井景子、小林久美子、相原直美、中垣恒太郎、山野敬士、越智博美、宮本敬子、相原優子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 358
3. 書名 『アメリカ文学と映画』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----